

絵本で学ぶ色覚障害

「親子で考えるきっかけに」

教員らのグループ 高評価作翻訳、出版



絵本「エリックの赤・緑」日本語版の解説を担当した尾家宏昭さん＝国東市安岐町

色覚障害について正しく知ってもらおうと、県内の学校教員らでつくるグループが英語の絵本「エリックの赤・緑」を翻訳し、出版した。色の判別が苦手な子どもたちが悩みを抱え、将来の夢を諦めることがないようにと企画。海外で高い評価を受けている作品の初の日本語版で、「親子で考えるきっかけにしてほしい」と願っている。

色覚障害は赤と緑を近い色に感じるなどの特徴があり、ほとんどは先天的。日本は300万人以上いるといわれ、男性は20人に1人、女性は500人に1人とされる。

学校生活などで周りとの違いに気付く、初めて障害を認識するケースがあるという。誤解や偏見で悩むことがないように、県内の教員

や教員OBBらでつくるグループ「しきかく学習カラーメイト」が出版を企画。アメリカの原作者らと交渉し、7月末の発売にこぎ着けた。

主人公は色の見え方が風変わりな赤毛のエリック。宿題の質問を見逃し、サッカーで相手チームにパスするなど学校生活で失敗が続く。自分の個性に気付きな

がら、クラスメートたちと明るく触れ合う姿を描いている。原作は2013年発行。翻訳は同グループメンバー



翻訳を手掛けた、ごとうあさほさん

1で「ごとうあさほ」の名で活動する小学校教員が手掛けた。「互いを理解し、受け入れる大切さを学べる作品。ラストシーンのエリ

学校での検査は希望制

色覚障害について当事者が気付く機会は減っているという。

かつては学校の健康診断で調べていた。ほとんどは先天的で治療の対象でないため、差別や偏見を助長するとして問題化。国は学校保健安全法施行規則を一部改正し、2003年度以降は健診の「必須項目」から除外した。

航空機の乗組員や航空管制官、海技士などは色覚検査を応募条件にしている。進路を選ぶ高校3年になって初めて受診し、障害が分

かるケースが全国的に起きる。戸惑いや落胆を覚える子どもたちがいるとして、文部科学省は15年度、希望者が早い段階で色覚を調べられるよう検査制度の周知を都道府県教委に通知した。

大分県教委は「受診した児童・生徒数は集計していない」と説明するものの、就職に絡んで工業系高校などで希望する生徒が多いという。

8月24日にあった東京ハランピック開会式の入場行進では、黒地に黄色の文

ックを見て、何かを感じ取ってほしい」グループの代表を務める元中学校教育の尾家宏昭さん(62)＝国東市安岐町馬場は色覚障害の当事者で、作品の解説を担当した。「色の感じ方に優劣はないが、日本では鉄道や船舶などの仕事に就く際に制限を加えている現実がある。多様性について気軽に話せる社会になってほしい」と話している。(羽山草平)

絵本は2750円(税込み)。「しきかく学習カラーメイト」のホームページなどから購入できる。

字を配したアラカードが使用された。特定の色の識別がしにくい人だけでなく、誰もが見やすいユニバーサルデザインを考え方は徐々に広まりつつある。今回の絵本を出版したグループ「しきかく学習カラーメイト」は「色を使う美術の授業や、体育で身に着けるピアスなど、学校生活で困っている子どもたちがいる。検査を進めるだけでなく、見分けやすい色を使うようにするなど、適切な対応を求めている必要がある」と指摘する。